

書 評

病原微生物学 基礎と臨床 ▶ 荒川宜親, 神谷 茂, 柳 雄介 編

病原微生物学 基礎と臨床／荒川宜親, 神谷 茂, 柳雄介 編／東京化学同人 2014／B5判 312ページ 5,200円＋税

この本は、病原微生物の基礎性状を理解するとともに病原微生物により引き起こされる感染症の病理、診断、治療および予防を学習することを目的として出版されたところ。総ページ数約300ページという限られた中で、膨大な微生物学の内容から、何を書いて、何を書かないということは非常に難しい選択を迫られたと思う。しかし内容的には病原微生物についての必要な事項が網羅されており、細菌、ウイルス、真菌、寄生虫などの病原微生物について広くカバーしながら、細菌とウイルスを中心に記載されている。

1章が微生物概要であり、2章の細菌学総説に約70ページ、3章の細菌学各論に約50ページが割かれている。4章が真菌学である。5章と6章がウイルス学総論とウイルス学各論で、約60ページが割かれている。7章が寄生虫学である。そして、最後の8章と9章は微生物感染に対するワクチンと病原微生物の臨床で締めくくられている。

約50人の専門家が分担執筆をして書かれた本であるが、統一がとれたよい本となっている。これは、編者らが非常に努力した成果と推測できる。そして、吟味した必須の内容に限定することで、定価が5200円という値段に抑えられていると思われる。最近の学生は本を買わなくなっているが、学生が教科書として買いやすいようにという配慮が感じられる。簡単にネットで情報が得られる時代ではあるが、信頼のおける情報がいつでも得られるということで、手元において欲しい一冊である。

編者の荒川の専門が病原細菌学・感染症学、神谷が医学細菌学、そして柳がウイルス学とあり、この3人が医学部の出身であることから、本書は医学部生への微生物学教育に使うことを想定されて作られたのではないかと思う。この本によって、真菌や寄生虫を含めて、病原微生物学をきちんと臨床に役立つものにしたという意図がうかがわれる。そこには、将来医者になって実際に患者に接する際にも、この本を読み直して、正しい感染症への対応をして欲しいという願いが込められているような気がする。もちろん、医学部以外の歯学部、獣医学部、薬学部などで病原微生物を学ぶものにとっても、非常に良い教科書になるであろう。私の所属する理学部の学生にも読んでもらい、微生物の危険性（病原性）を理解して欲しい。そして、食中毒菌などの身近な例から、微生物を学ぶというのも悪くないのではないかと思う。

副題に「基礎と臨床」とうたわれているが、この基礎は臨床基礎という意味で、微生物学の基礎的な記述は比較的少ないようだ。医学的な対応をするためには基礎は重要であるが、生命科学の分野はいまだに新しい発見が相次ぎ日々進歩している状況であり、その内容を網羅することは不可能である。その意味において、必要不可欠な最小限の微生物基礎の内容は含まれている。ページ数の制限を考えると、基礎的な内容の記述の少ないことは、十分に理解できる。ただし、書評者のように理学研究科で研究をする立場からの希望として、将来改訂する場合には、もう少し基礎的な記述を増やして欲しいと思った。

(本間道夫 名古屋大学大学院理学研究科)